

今回の日食について

編集部（秦 茂，大越 治）

今年3月18日の皆既食は、1983年6月11日のインドネシア・ニューギニア日食について、数多くの企画がたてられ、天文アマチュアの間には日食フィーバーを巻き起こした。

このフィーバーの原因としては、今世紀最後（よくマスコミで使われる言葉であるが）の日本付近で見られる日食であることの他に、昨年9月23日の沖縄金環食がその引金になっていると思われる。実際、各観測ツアー参加者の中には、今回が皆既の初体験という人々が今までになく多く見られた。

日食直前までの各グループの企画、皆既食帯の経路などについては、前号までの日食情報誌に書き尽くされているので、ここでは繰り返しを避けることにして、その後のようすをまとめてみよう。（前号のP3で、その他のツアー情報の提供を呼びかけたが、新たな情報は得られなかった）

まず、ツアーの不成立について。これも前号で「船のツアーの不成立はどうやらなくなったようで、本当に安心しました」と書いたが、残念なことに日通虎ノ門支店の主催によるプレミアムーリエ号は最少催行人員に達せず、計画は中止となってしまった。前号を書くときに、電話で『もう中止ということははありませんね』と確認を取ったのだが、

結局、この企画に申し込んでいた人達は、他の船に移ったり地上のチームに入ったりしたようである。このように計画変更を余儀なくされた方からのレポートをお待ちしている。

名古屋のオリオン館企画のツアーは、別稿のようにJTB日本橋のチームに合流した。

航空機による観測では、当初4グループが計画を進めていたが、レシプロ機のチャーターを予定していた3グループは、乗員の人数制限や空港の使用許可時間の問題で、いずれも実行不可能となり、ジェット機を使用した別稿のグループのみ飛び立つことができた。

マスコミでは、航空機によるNHK、TBS、朝日新聞、中日（東京）新聞が、船舶ではNTVがにっぽん丸、TBSがゆうとびあ丸で、地上ではNHKがダバオで取材を行った。

日食当日、日本国内は北海道をのぞいて天候に恵まれず、せっかく学校（会社）を休んだのにだめだった、との声も聞かれた。

皆既帯の方は、それぞれ別稿で遠征された方々が書いておられるので、詳しくはそちらを読んでいただくことにして、ここでは順を追っておおまかに全体のようすをまとめてみよう。

インドネシア・スマトラ島のパレンバンでは、皆既中の高度20度という悪条件と、季節から天候が悪いという悪条件にもかかわらず（事実、仕事でなければあんな所に行くものか、とい

う某社社員の声もあった)、ミンダナオより治安が良いということで、多くのグループが集まって観測を行った。そして前夜の雨にもかかわらず、当日は薄雲を通してではあるがおおむね日食の全経過が観測できたようである。ただ、雲が低かったせいで、場所によりずいぶん見え方に差があったようだ。また、比較的良く見えたところでも、コロナの見え方についての評価にはいろいろあって、何度か快晴のコロナを見ている人達に言わせると30~40%の見え方だとのことである。

フィリピン・ミンダナオ島は、政情不安を理由にいくつかの旅行社が企画を中止し、外務省からは渡航自粛の勧告が出ていたが、旅行者の自主企画と言うことで約150名が日本から出かけた。これはアメリカ海軍天文台の回報(日食情報1987年3号に紹介)の気象情報によるところが大きいだろう。同回報では、ミンダナオ島のジェネラルサントスが気象的に最良であると、同地を最も詳しく紹介しているからである。

日本からの観測隊は多くがダバオ市で、そして2グループがジェネラルサントスにはいった。ここでの天候は予想に反して悪く、コロナやダイヤモンドリングをある程度に見られたのはほんの一部の人達であった。天候ばかりは如何ともしがたい。

問題の政情不安であるが、現地での印象は大きく2つに分かれるようだ。ダバオでは別稿のように、平和な日本ではお目にかかれなような実弾入りの自動小銃に、かなりの緊張感を肌で感じた人が多い。恐いのはゲリラではなく、ゲリラの襲撃におびえる警備兵の方であるとの話も聞かれた。一方、ジェネラルサントスではお祭騒ぎの中、不穏な動きは見られなかった。しかし、これはアキノ大統領一家が同地で日食を見るため、フィリピン国軍が同地を完全に包囲・制圧していたということを見逃すわけにはいかない。包囲網の中は国の面子にかけても別天地となる。今後ますます日食ブームが進む中、十分に考えなければならない問題がここにある。

3月19日発行のミンダナオの地方新聞”デイリー・ミラー””ザ・デイリー・サンペドロ・エクスプレス”誌が入手できたのでその一部を紹介する。

新聞によると”ダバオの人々は、曇り空と回教徒の反乱の脅威にさらされながらも、皆既日食の全経過を経験した。皆既中の恒星や惑星は全く見えなかったが”との書き出しで、”朝9時の気温27.3度が、9時8分には25.8度まで低下した”と伝えている。

ダバオでは、日本からの天文アマチュアのリーダーの一人、森友和氏がインタビューに答えて”初期の悪天候にもかかわらず、グループの全員は日食を目撃したことに満足している”と述べている。また”写真家・八坂康彦氏の携行した望遠カメラは7812ドルもした”との記述も見られる。

日食中心線に最も近いジェネラルサントス市には、少なくとも9カ国(アメリカ・カナダ・西独・日本・ベルギーなど)からの観測者300人が集まっていた。天文の専門家についての記述は少ないが、ギリシャ系のイギリスからの天文学者が、アインシュタインの相対性理論の検

証のため、強力な望遠カメラで恒星位置を撮影する計画であるとの記事が載っていた。同市は日食の10分前までは快晴、東の方から雲が広がってきて、直前のダイヤモンドリングがやっと見えた程度であり、雲の間から内部コロナが見えたと伝えられている。

天文の専門家の記事は少ないが、アキノ大統領の記述は詳しい。”大統領は日食当日に現地入りし、日食中心線から少なくとも2 km以内の農場に、二人の娘さん、バルシー、ヴィエル嬢とともに観望されたが、日食を妨げた雲のために、予期された恒星も惑星も見ることができなかった”と報じている。

当日のNHKテレビは、ほとんど機上とダバオの観測風景で、森友和氏と遠山御幸氏が何回か画面に出られたのをご覧になった方も多いであろう。

インドネシア・フィリピンともに観測ツアーとしてでなく、個人的に出かけられた方もかなりの人数にのぼるとみられる。

小笠原諸島付近の海域では、雲に追いかけられながらのコロナ観望という観測船もあったと聞かすが、ほとんど晴天に恵まれて成功を納めたもようである。おがさわら丸に乗られた広瀬信彦氏からは「この世のものとも思われぬ美しさ。参加者全員感激にて1991年ハワイに行きたいとのことでした」とのお便りを受け取っている。

電話ではあるが、さんふらわー7の乗客から「皆既中はまぶしいくらいの快晴だったが、霧状のものが見えていた」との報告があった。霧状のものとは一体何を意味しているのだろうか。また、にっぽん丸での観測者からは、「移動する船の上では、シャドーバンドが非常におもしろいふるまいをする」という報告もあった。いずれ本誌でも紹介したいと思う。外洋では多くの方が船酔に悩まされたであろうが、その後で見るコロナはまた感激的であったであろう。

アマチュアとして唯一、機上観測を行ったグループは、低気圧による高層の雲に悩まされ、所期の目的は達せられなかったようだが、速度による皆既時間の延長があり、十分満足して帰ったようだ。

太陽活動の極小期から約1年半であるが、当日のスケッチによると、太陽の赤道方向に東西に伸びていちぢるしい流線とポーラープリュームがはっきりと記録されていて、コロナの形は極小期のそれであった。

以上、今日までに知り得た断片的なニュースをお伝えする。”日食情報”の本号および次のNo3は、実際に観測された方々の記録で埋められる。また、今日の日食報告会の報告・スライドと併せて、エクリプス・ハンター諸氏の次回の日食行の参考としていただきたい。

なお、今回の日食全体の詳細なまとめは、現在、木村精二氏によってまとめられつつある。いずれ”星の手帖”誌に発表される予定であるので、そちらもご覧いただきたい。

